

玉川のほとりにて

尾上八郎

秋の空一つも雲もうかべぬに心をさなくよろこびにけり。
岡の邊の小松の林秋されば隙多くなり遠き川見ゆ。
目にさはるもの一つなき石原に深く息して見やる大空。
乾きたる秋のみ空におほはれて野はしづやかに衰ふるかな。
夕日さす川原の小草さら／＼とならして秋の蛇ぞのがるる。
夕ぐれのせまり来れば薄赤う枯れにし秋の草ぞけぶれる。
ほの／＼とゆふべのかげの匂ふより富士あかるうもなりてゆくかな。
青き水ゆふべくろみを帯びて来ぬさびしかるべし魚のはぬるは。
こま／＼と鳥のあとこそつゞきけれ川原の石のゆふべ白きに。
いづ方に急げる水ぞ夕やけに河原の石のあかき夕ぐれ。

髪

中山八千代

よくぞ我れ女の身とは生れ来しこの三尺の髪のか黒さ。
清らけき水にひたれる我が髪のひとつ筋ごとに光るめてたさ。
脊に垂れし我が三尺のあらひ髪尖にいさ／＼か波うちてあり。
さら／＼と櫛のとほりも心地よき洗ひ髪ふく窓の朝風。
いさ／＼かの癖だになくてふくらめる鬢のうれしさよき朝かな。
このために生きてありたる如くにもうれしかりけり秋の日の旅(以下旅にて)
我が汽車のよらで過き行く停車場に月見草咲く夕まぐれかな。
櫛の葉のあまたが落ちてからび居る秋の山路をふみ我れら行く。
前の舟にも云ひかくる舟頭のこゑ響くなり朝の湖。
山のかげ静かにゆれて我が舟は今水の面をすべり行くなり。